

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

目の見えない人は、目の見える人と同じやり方ではプレイしません。たとえば短距離の一〇〇メートル走。見える人であれば、スターターの合図とともに飛び出し、ゴールをめがけて決められたレーンを一直接線に走ることになります。ところが、レーンを区切るラインもスターターの位置を示すしるしも、目の見えない人にとってはナンセンス「意味のないこと」です。私自身、陸上部出身で、陸上競技場のグラフィカル「視覚的」な美しさにぞくぞくしたのですが、今思えば、あの空間は恐ろしいほど視覚偏重の空間だったことになりました。

そこで目の見えない人がスポーツをするときには、見える人と同じ空間を用いつつ、異なるルールや異なる実施方法でそれを行うことになります。一〇〇メートル走の場合であれば、全盲など重度視覚障害のクラスでは、健常者の伴走者（ガイド）をつけなければなりません。あるいはブラインドサッカー「ブラインド」は「目の見えない」の意でも、ボールを持つている選手に近づいていくときは「ボーイ」と声で知らせる義務があります。ゴールボール（全員目隠しをして行う球技）でも、攻撃時にノイズ「不要な音や声」を出すことは禁止。視覚を使わないことを加^aミして、ルール上の配慮がなされているのです。

注意しなければならぬのは、こうした配慮が①「いわる」「ハンデ」ではないこと。私も最初は、「見えない人の一〇〇メートル走では伴走者をつける」と聞いて、「視覚がない分を伴走者で埋めあわせるのだな」と思っていました。「伴走者」あるいは「ガイド」という言い方が、いかにも「選手と並んで走りサポーターする」というイメージを与えるので、そのように思ってしまったのです。しかし実際に選手に話を聞いてみると、実情はずいぶん違っていました。

まず、「伴走」と言っても一〇〇メートル走の場合は「並んで走る」とはちよつと違います。むしろ「共に走る」のです。

何しろ、選手と伴走者は紐で手を結びつけあっています。紐で結ばれた手と手の距離は、高田選手（全盲の陸上選手）の場合わずか約一〇センチ。その状態で、ゴールまで一気に走っていくのです。

ここにあるのは、共同作業としての一〇〇メートル走です。ぴったり息のあった美しい走りを見ていると「シンクロナイズド・ランニング」なんていう言葉さえ浮かんできます。それは私たちが一般に思い浮かべるあの見える人向けの「一〇〇メートル走とは異なる、全く別の一〇〇メートル走の姿」です。

「美しい走り」と言いましたが、それが容易なものではないことはすぐに想像がつ

ります。

しかし、実際にはそうではありませんでした。確かに伴走者の存在は、見えない人が見える人と同じように一〇〇メートルの直線を走ることを可能にしています。けれどもそのことが同時に、種目の内容を変え、技術を競い合う新しいポイントを作り出しているのです。つまり、伴走者はマイナスを^Yにしているのではなく、新しい一〇〇メートル走を作り出しているのです。

ブラインドサッカーやゴールボールで使う、音が出るボールでも事情は同じです。ボールに金属の球や鈴を入れることは、^I「見えない人もボールを扱えるようにするための配慮」です。しかしその結果として実現されるのは、「同じ」ではない。音がするボールだからこそ「音でフェイント（相手をまどわす動作）をかける技術」や「音を立てないでパスする技術」が問われるようになります。ボールそのものの転がり方も変化します。^{II}、「新しい球技」が生み出されるのです。

先に「空間の人工性」のところでお話ししたとおり、^④「そもそもスポーツは、そしてより本質的にはゲームとは、何らかの制限を設けることによって成り立っています」。「ラインの外に出ないこと」「手を使わないこと」「チャンスは決められた回数まで」「ボールを前に投げてはいけない」「制限時間を超えてプレイすることは無効」……とにかくスポーツは否定形ばかりなのです。

もちろん、これらの否定形の中には、選手の安全を目的としたものもあります。でもゲームの本質を成しているのは、あえてプレイヤーの運動を制限するような否定形の数々。近代スポーツは、人の動きに対して人工的に制限を課すことで、放つておけばケンカや場合によっては戦争になるものをゲームに変え、競い合うことを可能にしているのです。

たとえば、ボールをゴールに入れることが目的なのであれば、手を使わないでそれをやるというサッカーのルールは明らかに理不尽です。ましてやオフサイド（サッカーのルールの一つ）なんて、ボールがゴールに入ることを遅延させるための妨害でしかありません。しかし、あえてそうした制限をつけることで、サッカーはゲームとして面白くなっているのです。

サッカーの原型は、村全体を巻き込む祭りのようなものだったと言われています。ゴールにされたのは村はずれの水車や畑の門。そこまで運ぶためならボールを川に投げ入れることもあれば、女装した人がベチコート（女性の下着の一種）の下に隠し持ったり、はたまた夜が来るのを待って顔に灰を塗った人がこっそり運んでいた、なんていうことも。もちろんボールと関係ないところで血まみれの乱闘も起こったことでしょう。

そんな「何でもあり」の祝祭に対して、時代とともにさまざまなルールが整備さ

きます。まず、選手と伴走者はスターターの位置を調整して、最初の一步をスタートラインから等距離の位置に、同じタイミングで着けるようにする必要があります。そこから先も、体の大きさが違うにもかかわらず、車の両輪のようにペースを合わせて一歩一歩を刻まなくてはなりません。

足だけでなく手と手を結ぶ紐の張力も適度に保つ必要がありますし、ときに伴走者はこの紐を使って進むべき方向を選手に示します。逆に選手は伴走者の息の音を聞きながらペースを計るでしょうし、ゴール直前では伴走者が合図をかけて選手を先に行かせることになります。

これが二〇〇メートル走以上になると、同じ「共に走る」でも新たな戦略が必要になります。コーナー「曲がり角」という要素が加わるからです。高田選手によれば、コーナーでは伴走者が「壁」になり、選手が外に膨らむのを押さえつけながら走るのだそうです。

ここには、見える人の短距離走にはない、未知の技術、未知の戦略がまつています。そして、この技術、戦術のすべてのベースに厚い信頼関係があることは言うまでもありません。

「^X」ではありませんが、「共に走った仲」の精神的な結びつきは、

きわめて深いものがあります。以前、一〇〇名規模のメンバーが所属しているアマチュアの陸上クラブの練習に参加したことがありますが、そこで参加者が口々に言っていたのも、この結びつきの大切さでした。

厚い信頼関係のうえに成り立つ、「共に走る」ための技術や戦略。もちろん「一〇〇メートル走を走るのにかかった時間を競いあう」という意味では、見える人の一〇〇メートル走も見えない人の一〇〇メートル走も同じ種目です。実際、早く走るための腿の使い方や上体の運び方など、共通する技術もあるでしょう。

けれども、伴走がつくことによって、明らかに要素が増え、新しい知恵が求められていきます。そして、まさにこうしたポイントをめぐる、見えない人の「一〇〇メートル走は競われている。同じ種目でも、^②「解いている問題が違う」のです。だとすれば、伴走をつけることは決してハンデをつけることではありません。

一般にハンデとは、参加者間の能力差をならすために行われる操^bサです。小学生の^cト競走に幼稚園児が混じっていたら距離を短くしてあげる。プロとアマチュアで草野球をする場合にプロチームはアウト二回で交代とする。たとえばそんなふうに、明らかに能力が劣る参加者に（^③）を履かせたり、逆に優れている参加者に足かせとなるような条件を付与することで、能力の差を少なくするのです。

もし見えない選手に伴走をつける目的がハンデをつけることであれば、その意図は、見えない選手に見える選手と同等にすることを目指したものだということにな

れていくことになります。そうして制限を課すことで、当事者だけでなく観客にも開かれたゲームとしてのサッカーが成立したのです。

人の動きに制限を課すことでスポーツが成立する。視覚を使わないことも、こうした制限の一つと考えることができるのではないのでしょうか。「手を使わないこと」や「線をはみ出さないこと」と同じように、「視覚を使わないこと」によって独特の運動が生まれ、特有の仕方ゲームが活性化します。まさに、伴走者の存在や音のするボールは、そのようなゲームの条件として機能していました。

もちろん「見えないこと」は当事者にとつては障害です。サッカー選手は試合が終われば手を使うことができますが、目が見えない人は本人の意志でそれを選んだわけではありません。その意味で、スポーツの本質である「制限」と「障害」を同一視することはできません。

けれども、だからこそ、障害を一つの条件として活用することのできるスポーツという場の可能性が見えてきます。

（伊藤亜紗 著『目の見えないアスリートの身体論 なぜ視覚なしでプレイできるのか』より）

問1 太線部a・cと同じ漢字を含むものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「加ミ」 ア 自分のミ来について考える。 イ 彼女はミ覚がするどい。
ウ 夜空にミ日月が浮かぶ。 エ ものミ方が変わる。
オ ミ内をたよって東京に来る。

b 「操サ」 ア サ国の時代について学ぶ。 イ 水質を検サする。
ウ 格サ社会となる。 エ 上下サ右を見回す。
オ こまかいサ業を行う。

c 「ト競走」 ア 日本の首トは東京だ。 イ ト書館で勉強している。
ウ 夏休みにト米する。 エ 熱心なキリスト教の信ト。
オ ト中であきらめるな。

問2 次は、傍線部①中の「ハンデ」について説明したものです。空欄A・Bに入る適切な表現を、傍線部①から傍線部④までの本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出し、答えなさい。

「ハンデ」とは、競技者間の「A（七字）」ことを目的としており、視覚障害者の競技においては、「B（十八字）」ための配慮であるといえる。

問3 空欄Xに入る慣用句として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 親しき仲にも礼儀あり イ 寄らば大樹の陰
ウ 朱に交われれば赤くなる エ 同じ釜の飯を食う

問4 傍線部②について、次の問いに答えなさい。

(1) 次は、傍線部について説明した文章です。空欄に共通して入る適切な表現を1ページの本文中から五字で抜き出し、答えなさい。

「解いている問題が違う」とは、目の見える人の競技と目の見えない人の競技とは、たとえ同じ種目であっても、より良い結果を得るために解決すべき「問題」（課題）が異なるということである。そのため障害者競技は、目の見える人には求められない を必要とし、その によって独自の技術や戦術を生み出している。

よって目の見えない人に伴走者を補うことは、ハンデをつけることとは意味合いが異なるのである。

(2) 次の①～④は短距離走についての説明です。目の見えない人の競技における「問題」を説明したものにはAを、目の見える人の競技における「問題」を説明したものにはBを、両者に共通する「問題」を説明したものにはCを書きなさい。

問9 次は、本文を読んだ明子さんと星子さんの会話です。会話文を読み、後の問いに答えなさい。

明子 本文に出てきたブラインドサッカー、私、学校の授業でやったことあるわ。

星子 どうだった？

明子 目隠ししてのサッカーは正直こわかった。何かにぶつかりそうで。周りの声や音だけが頼りだったんだ。でもね、先生からうかがった選手の方たちの工夫には驚かされたわ。音が重要だということを逆手にとって、あえて「A」という方法もあるんだって。

星子 すごい！ ふつう思いつかないわね。何か、私たちの知っているサッカーというより、新しいスポーツが生まれているみたいね。

明子 本当にそうだね。障害者スポーツは健常者スポーツをもとにしながらも、それとは全く違った独特の楽しさを持っているよね。筆者は、障害を制限と同一視してはいないけれど、「B」という考え方を示そうとしている気がするわ。制限をきっかけに発想の転換を図って面白さを追求する人間の創造力は無限ね。

星子 そう考えると、障害者スポーツは、高齢者や子どもも楽しめるものになるかもね。二〇二〇年東京パラリンピックが楽しみね！

(1) 空欄Aに入る適切な表現を考え、四字で答えなさい。

(2) 空欄Bに入る表現として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 制限をなくす力をもつ障害
イ 障害という制限のきびしさ
ウ 制限のひとつとしての障害
エ 制限と障害の共存の可能性

(3) 傍線部「制限をきっかけに――追求する」とありますが、スポーツに限らず遊びにおいても同様のことが言えます。視覚を使わないで行うからこそ面白さが生まれる遊びの名前を、ひらがな五字で答えなさい。

① 選手はスタート位置を調整し、人とペースを合わせたり合図を聞き逃さないようにしたりする。

② 選手は腿の使い方や体の運び方を工夫し、はやく走れるようにトレーニングをする。

③ 二〇メートル走でコーナーを走る際は、できるだけ外にふくらまないように工夫する。

④ 一〇〇メートル走の場合、選手はよりはやくスタートすることだけを考え、ゴールに向かってレーンを一直線に走る。

問5 傍線部③「 」を履かせる」は慣用句です。空欄に入る適切な語をひらがな二字で答えなさい。

問6 空欄Yに入る適切な語を三字以内で考え、カタカナで答えなさい。

問7 空欄I・IIに入る適切な語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア さらに イ つまり ウ 確かに エ ところが オ それから

問8 次の各文は、傍線部④中の「何らかの制限を設けること」の意義について、サッカーを例として説明したものです。適切でないものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 簡単には得点できない工夫をすることで、一点を取ることへの期待と興奮を高めることができる。

イ 観客の要望に合わせてルールを定めることで、競技場の観客動員数を増やすことができる。

ウ ルールを明確にすることで、競技をする人も競技を観る人もゲームを楽しむことができる。

エ 秩序のない争いになることをさけ、ゲームとしてのスポーツを成立させることができる。

オ 両チームが点を奪い合うような競争をなくし、それぞれのチームの良さを引き出すことができる。

二 次の文章は、神田 茜作「クリムシチュー」の一節です。本文を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

「僕」(日吉 啓太)は高校受験を間近に控えた中学三年生です。次は、昭和六十一年二月三日節分の日、友達村田君と学校に向かっている場面です。

「祖母ちゃんたち、一緒に住めばいいのに。なんで別々なんだ？」

祖父母のことを聞かれると、ちよつとドキリとする。答え方を考えてしまふ。

「なんかよくわかんないけど、公営住宅が建ったときに申し込んだら当たったんだって。年寄りばかりで暮らした方が気楽なんだって」

「ふうん、確かに、なんかよくわかんないな」

本当は少しちがう。もともと祖父が建てた家に母親が嫁いできたのだが、父親はそのころから出張が多く留守がちで、母親は祖母と折り合いがわるかったらしい。祖父は優しいのだが影が薄くて、祖母の存在が大きな家だ。

細かいことを気にして口うるさい祖母と、おおよっぱに自己流でやりたい母親が、一緒に家事をやるとう当然ぶつかることになり、よく母親が家出して実家に逃げ帰っていたらしい。

僕と弟が生まれて実家の父親が亡くなると、母親は逃げ場所がなくなり、どんどん痩せてかなり参ってしまい、祖父母と別居したいと言いつつ出たそう。それを知った祖父が公営住宅に申し込んで、そちらに引っ越しをした。これは父親がこっそり僕にだけ教えてくれた。

僕が中一のときに三年の男子から、「お前のかーちゃん、鬼みたいな嫁なんだってな」とからかわれ落ち込んで帰った日のことだ。たまたま父親が家にいて、からかわれたことをそれとなく口にした。夜に一緒に風呂に入ろうと言われ、湯船につかりながらその話を聞いた。

そんなことがあったなんて、ぜんぜん知らなかった。母親が祖父母を追いつ出したことになっているのだろう。けれど、母親は祖母と仲がわるいそぶりも見せず、僕たちには祖父母を大切にするようにと、しつこいくらい口にしていた。

へ 中略 その日の放課後、中学一年生の弟悟志と波多野 純(クラスメイトの波多野さんの弟とがけんかとなり、純が耳にケガをし、出血してしまいました。)

学校から電話があったのか、玄関の前に母親が立っていた。悟志がこんなことになるなんて、さぞ怒り狂っているだろう。目の縁が赤くなっている。

ほうが、これから悟志君と波多野君も、仲直りしやすいと思いますが」

「それはもう悟志がゴメンって言ったそうなので、あとはまかせておきます。悟志がわるいわけではありせんから。遊んでいたときの事故ですから」

④ びっくりした。母親のその強気な言い方が信じられなかった。どうして悟志が嘘をついているとわからないのだろう。

「しかし、波多野君のご両親は、被害者と感じるかもしれませんし」

「波多野さんなら、私も知らないわけではありせんので、お電話で話します」

「お互いの親同士で顔を合せてお話しになったほうが、後々のわだかまりがないかと思いますが」

「何うまでもないです。悟志がけんかじやないと言っているのですから」

母親はこれほど頑固な性格だったろうか。どうしても謝らないという口ぶりだ。

先生たちは無然としながら帰っていった。ふたりだけで波多野さんの家までお見舞いに行くそう。僕は母親と一緒にいけばいいのと思ったが、母親は当然というように玄関で先生たちを見送るだけだった。

車のなかで先生たちは、父親が留守がちな家だからと呆れているだろうか。子どもに厳しくできない母親だから困ったのだと話しているだろうか。

「悟志は？ ケガはなかったの？」

「うん」

「どうして先生って、謝ることばかり言うのかしらね。ふざけていただけなんだから、平等にあつかってほしいわよね」

「うん」

「悟志が嘘ついてるみたいに言って、本当に腹が立つわ」

⑤ 部屋に戻って勉強をはじめたが、なかなか集中できない。同じ部屋の二段ベッドの上の段で、悟志は布団を被っている。

波多野さんの家に電話している母親の声が聞こえてくる。口では強気なことを言っているが実際は「すみませんね、危ないものを振り回してしまつて。男の子は乱暴ですから」などと、謝っているような言い方をしていた。悟志にも聞こえているはずだ。

「おい、悟志、なんで嘘つくんだよ」

ベッドの上の段に向かって言ったが返事はない。

「本当はお前がカーッとなって手を出したんだろ？ けんかだったんだろ？ 手を出したほうがわるいんだぞ。お母さんのこと騙して、庇ってもらって、それで嬉しか？ お母さんが恥かくことになったじゃないか」

「わざわざ来ていただいて、申し訳ございません」

居間に全員が座ってから、母親が床に両手について頭を下げた。

「悟志君はいつも真面目で、友達の信頼もあついお子さんです。私もそれは十分わかっておりますので」

教頭先生の話を、① 母親は頭を下げたり上げたりしながら聞いている。

「今回は放課後のテニス部の部活中にテニスコートの除雪をしようとしていたそうです。ちよつと口げんかになったとかで、悟志君が雪かき用のスコップを振り回し、波多野君の耳にあたつて、耳の上を切りました。念のため病院で手当てしてもらいましたが、縫うほどではない切り傷で、絆創膏を貼って帰宅したそうです」

「はあ、そうですか。よかった」

母親はそう言つて力が抜けたように背中を丸くした。傷がひどくなくて僕もほつとした。

「そのときの状況を一緒にいた生徒に聞いたのですが、はっきり見ていなかったそうです。それで、けんかの理由なんです、いくら聞いても悟志君、教えてくれません」

俯いている悟志に、いっせいに視線が集まった。悟志が顔を上げてふくれっ面をした。

「けんかじやないです。ふざけ合っていただけです。そしたらたまたま波多野にあつたんです。僕、すぐゴメンて言いました」

悟志は② 悪びれもしないでそう言うが、あのときの姿からすると、嘘をついているような気がする。本当は悟志がカーッとなって手を出したはずだ。女子をめぐつての取り合いだったとしたら、きつと恥ずかしいのだ。

母親はお見通しだろう。悟志のことを厳しく叱るか、もしかしたら叩くかもしれない。「自分がやられたらどんな気持ちになるか、よく考えなさい」。兄弟げんかをするたびにそう叱られて、ふたりともが頭を叩かれる。今は先生たちの手前、悟志の顔をちらちらと窺っているだけだ。

「悟志君はふざけていただけだと思つていても、波多野君はけんかしたと言つていますから、やはり、波多野さんのお宅に謝りに行つたほうがよろしいかと思ひます」

③ 教頭先生が母親にそう告げる。

「いえ、悟志がふざけていただけで言うんですから、ふざけていただけなんです。故意にはなくて、遊んでいるときの事故です。お互いにわるかつたのですから、お電話で波多野君のお見舞いを言います。謝る必要はないでしょう」

母親は淡々とそんなことを口にした。

「いやしかし、ケガをしていますから、ここはケガをさせたほうが謝つてしまったしばらく布団は動きもせず、寝てしまつたのかと思つたが、涙が聞こえてきた。悟志は泣いているらしい。やつぱり嘘をついていたのだ。

やる気が出るまでとりあえず英単語を復習しようと単語帳を開いたが、どうも頭に入つてこない。波多野さんの家では今どんな話になっているのか。うちの親たちや悟志のことをとやかく言っているかもしれない。こんなときに長男ならばどうするべきか、いちおう考えてみようと思うが、答えがぜんぜん思いつかない。

同じような経験がなかったか考えているうちに、ふいに思ひ出すことがあつた。ずいぶん前、確か、僕が小学校三年のときだ。

暗くなつてから父に手をつながれて雪解け水でぬかるんだ道を歩いた。村田酒店に向かつて。そのころから赤い顔をしていた村田の親父さんに、うちの父親が頭を下げて謝つた。

その場面は強烈でよく覚えていたが、理由を忘れかけていた。

僕がケガをさせた……。

そう。あれは村田がガラスで手の甲を切つたのだつた。小学校のトイレの引き戸だ。細長いガラスがはまつている戸だった。

休み時間になつて走つてトイレに行くと、先に着いた村田がふざけて引き戸を閉めて、僕を入れさせまいとした。僕は開けるよと戸を叩いて、村田は内側から戸を押さえていた。それで戸にはまつている細長いガラスがパリンと割れた。気がつくのと村田の手の甲に三センチくらいの赤い線が出来ていた。すぐに先生が駆けつけてきて、村田の手を頭の上まで持ち上げて保健室へ連れて行つた。

近くにいた同級生たちが、僕のことを見ていた。僕は自分がわるいことをしたとは少しも思わなかつた。それなのに涙が流れてきて、みんなの前で泣いてしまつた。僕が村田にケガをさせたとみんなが思っているような気がしたからだ。

⑥ 今回の悟志と同じじゃないか。僕も流血事件を経験していた。血を見ると周りの人間は加害者と被害者を勝手に判断するのだ。血を流しているほうが被害者で、もう一方が加害者。

そのとき学校では味方がひとりもいなかった。友達や先生の全員に犯人を見るような目で見られて、陰口を言われているような気がした。今思えば被害妄想というやつで、みんなが敵に見えたのかもしれない。家に帰つてからやつと信じてくれるひとが現れて心底ほつとした。母親だ。

「そう、村田君がふざけて戸を開めたから、啓太が開けようとしているうちにガラスが割れたのね。それは村田君がわるいわ。啓太はなんにもわるくない。啓太も危なかつたのね。もう、村田君はどうしてそんな意地悪するのかしら」

夜になつて父親が帰つてきて、僕は手を引かれて村田の家まで謝りに行つた。そ

のときにも母親は「啓太はわるくないのよ」と、父親に訴えていた。あんまり母親が村田のことを悪者にするから、僕は胸のうちに「村田はいつも仲良くしてくれて、いいやつなのに」と、村田に申し訳ない気持ちになった。

父親はどちらの味方もしなかった。でも、村田酒店の店先に立ち、「うちの息子がすみませんでした」と深々と頭を下げていた。

あれから小学校六年生までと中学の三年間、村田とずっと友達でいられた。あんな流血事件があったことを忘れそうになるくらい、わだかまりは残らなかった。

夕飯は僕が大好きな、やわらかい鶏肉がたくさん入ったクリームシチューだった。コーンの黄色とニンジンしんじんの赤の彩りがきれいで、そこも好きだ。悟志はちゃんとご飯は食べているが、ほとんど喋らなかつた。

「シチュー、祖母ちゃんちに、持つて行く？」

「うん、たくさん作ったからあとで持つて行つて」

週に一回くらい、シチューやカレーやロールキャベツを鍋ごと風呂敷ふろしきに包んで届けに行く。たいてい僕が行く。祖母があまり喜ばないから、そんな様子を悟志に見せないほうがいいだろうと、勝手に考えていた。

「悟志、今日はお前が届けに行けよ」

「なんでだよ」

「家の手伝いだよ。それくらいしろよ」

夕飯が済んでから、悟志は風呂敷に包んだシチューの鍋を持つて出かけて行つた。少ししてから僕は「村田に貸したノートを取りに行つてくる」と母親に言つて家を出た。

計算通り、悟志が夜道を向こうから帰つてくるところだった。

「おい、悟志、波多野さんに謝りに行くぞ」

「え？」

「謝りに行くんだよ」

「うん……」

素直に僕の後ろをついてきた。波多野さんの家は駅前の**b** 床屋だ。お父さんが床屋さん、お母さんが隣の店で美容師をしている。歩いて七、八分くらいか。

父親がいるときであつたら、今日のこともぜんぜん違つたのだろう。先生たちが家に来て、謝つたほうがいいと言われたときに、父親ならすぐに悟志を連れて謝りに行つたはずだ。母親が悟志はわるくないと庇つたとしても、やっぱり父親は悟志の不注意だと叱るはずだ。

母親はちよつと極端な性格で、バランスがわるいのだ。好き嫌いがはっきりして

いて、それが行きすぎてしまうことがある。小さいころはわからなかつたけれど、最近はその気がしている。

大事なものはとことん大事にする。僕らのことも大事にしすぎて、愛情が深すぎて、それで周りが見えなくなつてしまう。だから父親が間に入つてバランスをとつてくれるとちよつといい。母親と祖母の仲も、きつと父親が不在だつたせいでわるくなつただけなのだ。昔のことは僕も小さくてわからなかつた。でも今は少し理解できる。

床屋と美容院の明かりはもう消えて、勝手口のほうのドアの窓から明かりがもれていた。プザーを鳴らすと、**A** 食事中だつたのか口をもぐもぐさせながら波多野さんのお母さんが戸を開けてくれた。

「日吉です」

「ああ、日吉君」

「あの、弟がすいませんでした」

大きな声で勢いをつけてそう言つた。

「あらまあ、わざわざ来てくれたの？ 純一、ちよつとー」

奥に向かつて波多野君を呼ぶと、耳の上に大きな絆創膏を貼つた姿で現れた。

「あ、ごめんね、あの、弟がちゃんと謝りたいつて」

後ろにいた悟志の腕を引く張ると、固くなりながらも僕の前に来て「ごめん」と頭を下げた。**I** 波多野君は仏頂面で「うん」と頷いた。

「まあまあ、寒いからいいのに。気をつけて帰つてね」

頭を深く下げて僕はドアを閉めた。緊張が解けて、全身の力が抜けた。今になつて胸がドキドキしていたことがわかつた。

「よかつたな」

「うん」

悟志も頬を **X** いる。ほつとしていいるということは、すごく反省していたのだろう。嘘をついてしまったことを後悔して、どうしたらいいかわからなくなつていたので。

「日吉くん」

波多野さんの声だ。**ウ** 振り向くと防寒着も着ていない波多野さんが、赤いセーター姿で走つてきた。足元だけ青の長靴だ。

「ごめんね」

吐いた息が途端に白くなつてすぐに消える。

「いや、悟志がわるいんだから」

「ちがうの」

固くなつた雪の表面に、豆がいくつか落ちる音が鳴り、すぐに窓が閉められ、カーテンも閉じられた。

「そうだ悟志、帰つたら豆まきだ」

「うん」

「寒いから、窓は開けなくてもいいよな」

「うん」

鬼なんかうちにはいないと思う。いや、いても別にかまわない。ふつう、どこの家にも鬼と福の神はセットでいるものではなからうか。

「お母さん、心配するから、早く帰ろう」

「うん」

「ちよつとでも遅くなつたら玄関前に立つからな。仁王立ちで」

「ふふ」

顔を上げて、悟志は白い息を吐いた。

明日になると、受験日まで十七日だ。

「受験のときな、緊張しないように、好きな食べ物のことを考えろといひんだつて。村田が教えてくれた」

「へえ」

「悟志の受験のときも、そうするといひぞ」

「うん」

「なんの食べ物のこと考える？」

「んー、寿司かな」

「そこは、お母さんの手料理だろ？ あれだけ庇つてもらつて」

「じゃあ、お母さんのカレーかな」

「僕は断然、クリームシチューだな」

夕飯で食べたばかりなのに、またすぐにでも食べたくなつた。

受験が終わつた日の夕飯に、クリームシチューをたのんでおこうと思つた。耳が凍りそうなほど冷たいけれど、雪灯りが道の先を照らしてくれていた。

「え？」

「純がひどいこと言つたつて白状した」

「ひどいこと？」

「うん。うちのお母さんの美容院に、日吉君のお祖母ちゃんも来るじゃない。それで、ほんの冗談で日吉君のお母さんのこと、うちの嫁はどうのこうのつて話して、それを純が聞いて、悟志君に言つてからかつたんだつて。そりゃあ怒るよね。ごめんね、悟志君」

エ 悟志が俯いたまま首を左右にふつた。波多野さんは「じゃあね、明日ね」と言つて背を向けた。駆け出しながら寒そうに肩をすくめていた。

見送つてからふたりで歩き始めた。体が冷え切つているから早く家に入りたい。

「波多野君と、女子の取り合いになつたのかと思つた」

「そんなことするわけないだろ」

「さつき祖母ちゃんさ、シチュー、喜んでたか？」

「いや、迷惑そうな顔してた」

「そうだろ」

「うん」

以前見てしまったことがある。ロールキャベツを届けに行くと、一週間前に届けたシチューがそのまま台所の床に置かれていた。僕が行くとそれをゴミ袋に捨てて、鍋だけ洗つてよこした。「年寄りには味が濃いんだ」と言いながら。

「せつかく作つたのに、食べないのかな」

「うん。でも、お母さんに言ふなよ」

「うん」

祖母は波多野さんの美容院で「うちの嫁は鬼みたいで」と話していたのだろう。なにも知らない悟志がその言葉を聞かされて、思わずカーツとなつてスコップを振り回してしまつたのだ。

ちゃんと教えてあげよう。父親が僕に教えてくれたときのように、風呂に入つて落ち着いてから。悟志と一緒に風呂に入ってくれるだろうか。風呂を嫌がったら、二段ベッドの下段から話して聞かせよう。

急ぎ足で家に向かつた。路面に薄氷が張つて、気を抜くと転びそうだ。

道沿いの家から、カーテンを開ける音と窓を開く音が聞こえてきた。**C** 軒下が蛍光灯で照らされ、姿は見えないがひとの声がする。

「鬼はーそとー、鬼はーそとー」

「あーさぶ」

「はやく閉めてよ」

問1 太線部 a 「縁」・b 「床屋」・c 「軒下」の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「母親は頭を下げたり上げたりしながら聞いている」について、この時の母親の心情として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　くわしい状況は分からないものの、息子が友達にケガをさせたということに
対して申し訳なく思っている。

イ 息子が友達にケガをさせてしまったことに親として責任を感じ、自分の育て方が悪かったとくやんでいる。

ウ　友達にケガをさせた息子に強い怒りを感じているが、先生たちの前で息子を叱るわけにもいかず我慢している。

エ 息子は友達にわざとケガをさせたのではないのに、悪いのは息子だと決めつけて話をする先生たちにあきれている。

問3 傍線部②「悪びれもしないで」・③「故意に」の意味として最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

②「悪びれもないで」ア 罪人らしい様子もなく

イ
ふざけたりもせず

ウ 恥ずかしそうにもせず

工
うそをつく様子もなく

③「故意に」

ア
一方的に

イ
わざと

ウ 仕返しとして

エ
いじわるに

問8 次の各文は波線部ア〜エについて説明したものです。説明として適切なものにはAを、適切でないものにはBを書きなさい。

① 波線部ア「食事中だったのか口をもぐもぐさせながら」やそれに続く会話からは、波多野君の母親が息子のケガを深刻にはとらえていないことが伝わってくる。

② 波線部イ「波多野君は仏頂面ぶつちやうめんで『うん』と頷うなずいた」からは、悟志の謝罪をおだやかな気持ちで受け入れようとする波多野君の姿勢さうしがうかがえる。

③ 波線部ウ「振り向くと防寒着も着ていない波多野さんが、赤いセーター姿で走ってきた」には、波多野さんの行動的で誠実な人柄が表れている。

④ 波線部工「悟志が俯いたまま首を左右にふった」からは、自分は悪くないのに謝罪させられた悟志の納得のいかない気持ちを読みとれる。

問9 空欄

X

 に入る最も適切な表現を次から選び、記号で答えなさい。

ア そめて イ ゆるめて ウ つねつて エ ふくらませて

問10 次は、本文における「クリームシチュー」のはたらきについて説明した文章です。空欄A・Bに入る適切な表現を、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出し、答えなさい。

本文の題名にもなっている「クリームシチュー」は、作品中で大切なはたらきをしている。祖母にとっては、自分を家から「A（五字）」鬼ともいえる嫁を、また啓太や悟志にとっては、自分たちを「B（七字）」してくれる福の神ともいえる母親を、同時に暗示しているのである。

問4 次は、傍線部④「びっくりした」について説明したものです。空欄A～Cに入る適切な語を、5ページの本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出し、答えなさい。

悟志の話が「A（二字）」ではないことを、母親は「B（四字）」だろうと啓太は思っていたのに、意外にも悟志の言い分に従って「C（二字）」ことをかたくなに断つたため「びつくりした」のである。

問5 次は、傍線部⑤「うん」と言った時の母親に対する悟志の気持ちを説明したものです。空欄A・Bに入る適切な表現を、それぞれ十字～十五字で考えて答えなさい。

悟志は母親に対して――
A
――と思う一方で

B

A
一 と思う気持ちもある。

一　　と思う一方で、

問6 傍線部⑥「今回の悟志と同じじゃないか」とありますが、どのような点で「同じ」のですか。本文中の表現を用いて六十字～七十五字で説明しなさい。

問7 傍線部⑦「シチュー、祖母ちゃんちに、持つて行く?」と言った時の啓太の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今日とは格別寒いので、祖母も母親のシチューを喜んでくれるにちがいない。

イ 波多野君との出来事で落ち込む弟を、祖母と会わせることで元気づけたい。

ウ　母親に迷惑をかけたのだから、弟にも母親の手伝いくらいはやらせたい。

工
弟と二人きりで話す機会を作り出し、波多野君の家に謝りに行かせたい。

解答用紙

受験番号

得 点

✖

✖

✖

✖

✖



	
---	---

問 9	問 5	問 4	問 2		問 1
(1)		(1)	B	A	a
					b
		問 6			
			問 3		
(2)					c
		(2)			
	問 7	①			
(3)	I				
		②			
	II				
		③			
	問 8				
		④			

[illegible]